

山里の異変

旧額田町合併10年

若い世代 集落で支え

額田地区全体の未成年者の人口(四月一日)は千二百九十一人と、二〇〇六年の合併時に比べ、約四分の三に減った。しかし、逆に当時より未成年者の割合が増え、高齢化率も下がった珍しい集落もある。

一番近いコンビニに行くのに車で三十分。最も奥まった集落の一つ、木下町は全二十三世帯、計七十五人のうち十九歳以下が十三人もいる。

「若い家族が増えることが何よりの活性化。過疎を嘆くだけでなく、自分たちでできることをやろう」。総代の加藤喜弘さんが中心となり、十五年ほど前から空き家に移住者を受け入れてきた。

二年前に岡崎市福岡町から越してきた藤井孝昌さん(四)、愛子さん(三)、風里君(二)の三人家族。「静かな環境で子育てしたい」と田舎で空き家を探していた時、偶然加藤さんと知り合った。家賃は月五千円。藤井さんはナス

④ 空き家に移住者



「人が温かい所に住めてよかった」と話す藤井孝昌さん、愛子さん、風里君＝岡崎市木下町で

栽培や庭師の仕事で生計を立てる。

加藤さんがこれまで受け入れたのは藤井さんを含め三世帯。「日用品の買い物は半日

がかり、近所付き合っても大変

話す。それでも住もうという

で町内会費も高い」。加藤さんは最初に「悪い所」を全て話す。それでも住もうという人には、「みんなで声を掛けて歓迎しよう」と住民たちと呼び掛ける。

藤井さんの家には、毎日のように近所のおばさんたちが漬物を持ってきたり、風里君の様子を見に来たりする。愛子さんは「みんな協力的で子

加藤さんは現在、木下町への移住を望む二世帯のため、空き家の持ち主と交渉を続けている。仏壇の処理や手続きの煩雑さなどから賃賃を渡す持ち主を何年も説得しなければならぬ。いずれは山里に魅力を感じる若い世代と空き家をつなぐ活動をシステム化したいと考えている。「真っ暗で寂しくなる集落を見たくないからね」

メモ 総務省の2013年の調査では、全国の空き家は820万戸。有効利用のため県内では12自治体が、インターネットで空き家の情報提供や入居者を募集する「空き家バンク」を設けている。豊田市は中山間地域を対象に10年から空き家バンクを始め、これまでに69世帯、156人が移住した。利用者は年々増加傾向で、200人程度が入居待ちだ。

＝終わり
担当しました)
(この連載は森田真奈子が